

ふるさと読本
わたしたちの黒石 第7集

津軽の和林檎と黒石最初のリンゴ園



リンゴの祖先 ‘ミツバシモツケソウ’

公益財団法人 黒石市民財団

ミツバシモツケソウ（英語名はギレニア）：この植物は恐竜が絶滅したのち、六千万年前の北米大陸で誕生した。やがて鳥によって中央アジアに運ばれて突然変異をくり返し、四千万年前にリンゴ、ナシ、マルメロなどの果樹に進化した。（P81、文献6）

— 目 次 —

一 はじめに

二 江戸時代の津軽にあつた和林檎

三 和林檎はどこから日本にやつてきたか

四 ペリー提督(ていどく)がお土産(みやげ)に持つてきた西洋リンゴの苗木

五 黒石に届いた西洋リンゴ苗木

(一) 明治政府(ため)が試しに植える苗木を配布

(二) 黒石町内のリンゴ栽培(さいばい)とその消滅

六 福民に誕生した最初のリンゴ園

(一) 境宥治(ゆうじ)が福民(ふくたみ)に果樹園をつくる

(二) 明治中期のリンゴ栽培の様子

(整木(せいぼく)、肥料(ひりょう)、病害防除(びょうがいぼうじよ)、保存(ほぞん))

一 はじめに

私たちの地方で栽培されているリンゴの先祖は今から一五〇年ほど前に、明治政府がヨーロッパやアメリカから輸入した多くの種類の苗木です。それらの苗木が津軽に植えられ、たびたびの品種改良によつて新しいリンゴが次々に誕生しました。

今では明治時代の古い品種のほとんどは姿を消してしまいましたが、時々店に並んでいる「紅玉」というリンゴは、明治時代から栽培されてい る古いリンゴの一種です。

明治時代に入るまで（殿様や侍がいた時代）、津軽にはピンポン玉くらいの小さなリンゴがありました。このリンゴを和林檎といいます。

今回のお話は津軽の和林檎から始まりますが、その前に世界にはさまざまなりんごがあることを紹介しておきます。

果実が小さなものには、直径一cmほどのサナシや二cm位のイヌリンゴがあり、津軽の雑木林にも生えていています。

古代ギリシャの哲学者（物事を深く考える学者）

（ものごと）

が食べていたりんごは正月に食べるミカン位の大ささでした。

もつと大きい、野球のボール位のりんごもあります。キルギスからカザフスタン南部を通つて、中国の新疆ウイグル地方まで長くのびている天山山脈の中に混じつている野生のりんご（注1）です。

その林には、いろいろな野生りんごが混じつて生えています。形が丸いもの、少し長いもの、赤い色や黄色のりんご、なかには緑や白いりんごもあります。

私たちが食べているりんごよりも味はおどりますが、決して食べられない訳ではありません。

皆さんのおじいさんやおばあさんが子供の頃に食べた大中や旭の味を想い出させるような酸味や渋味のあるりんごです。

ヤナギやボプラ、シラカバなどが混じつた自然林にボツン、ボツンと生えているりんごの木は、空に向かつて姿勢よくのびています。

もしも枝に果実が残つていなかつたら、誰もりんごの木であると気付かないかもしれません（4ページの図1）。

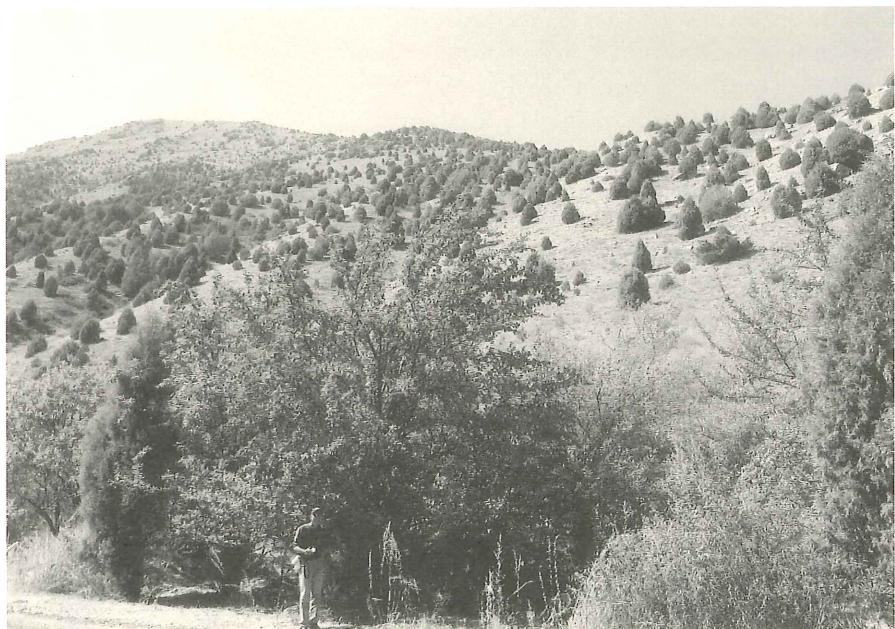


図1 天山山脈の野生リンゴ（中央に数本が生えている）

何百年もの昔に、リンゴを売つて暮らして
いた人々は、自然林の中につつた甘くて大き
くて、保存ができるリンゴの木を掘り起こし
て自宅の畠に植えました。

自宅に運べないときは、枝を切つて持ち帰
り、別の木に接ぎ木(注2)をしました。やがて
その枝に甘くて大きく、日持ちがするリンゴ
が実るのです。

リンゴは種(たね)をまいて育ても、親と同じ
品質のリンゴは実りませんが(注3)、接ぎ木を
すれば、その枝に親と同じリンゴが実ります。
評判(ひょうばん)がいいリンゴは人々が買い求めます。
そのリンゴを大量に市場(いちば)に届けるため、接ぎ
木によつて多くの苗木が作られ、やがて
果樹園(かじゅえん)ができました。

そのようなリンゴを栽培リンゴと呼んでい

ます。野生のリンゴの中から販売^{はんばい}や加工^{かこう}をして選ばれ、苗木が育てられて、果樹園に植えられるようになつたりンゴが栽培リンゴです。

(注1) 天山山脈周辺の広葉樹林に生育している野生種はシーベルシイ種 (*Malus sieberi*)^{シエベリ}で、この種名は、一九七六年に中国西北部国境の塔城市的西にあるカザフスタン領・ウルジヤル渓谷で、このリンゴの存在を始めて報告したドイツの商業紙特派員シーバースの名に由来する。

(注2) 接ぎ木は古代社会で交易が拡大し、同じ品質の果実を大量に生産する必要性があつて生まれた技術である。メソポタミアでは前三五〇〇年頃、青銅器の小刀や斧が使われており、接ぎ木も実施されていたと思われる。

(注3) 一般に、果実の種子は、それぞれの持つ遺伝子の内容が微妙に異なつていて、遺伝子が全く同じ場合は、生育環境の変化によつて全てが死滅する恐れがあるが、異なる遺伝子を持つた種子はどれかが生き残る可能性がある。それぞれの種子が微妙に異なる遺伝子を持っているのは、生存のチャンスを広げようとする種の進化によるものである。

天山山脈の自然林^{しぜんりん}にあつたりンゴがヨーロッパに運ばれました。ギリシャやローマで品種改良が行われて（突然変異^{とつぜんへんい}で現れた優良^{ゆうりょう}な果実の枝を接ぎ木で増やす）、やがて世界中で栽培されているリンゴが誕生しました。

現在栽培されている多くのリンゴの遺伝子^{いだんし}が詳しく研究^{けんきゅう}されました。

これらの研究によつて平成二十二年（二〇一〇）、私たちが食べているりンゴの遠い祖先が天山山脈の野生リンゴであることが判つたのです。

この野生リンゴが、いつ頃にギリシャやローマに渡つたのか、くわしく

判つていませんが、アレキサンドロス大王の大軍が東アジアとインドに遠征した紀元前三二〇年頃には、ギリシャに送られていたと思われます。

アレキサンドロスの軍勢には兵士の他に、天文地理、植物、動物などに教養がある多くの学者が加わつていました。

征服した国々にあつた珍しい植物や動物はギリシャに送られました。

それを受け取つて管理し、研究をしていたのはアリストテレス（ギリシャの科学者）の弟子たちでした。

クルミもその一つで、アレキサンドロスの学者が天山山脈の南西部にあるフェルガーナ地方（ウズベキスタンの東部）で種子が大きいクルミを見つけ、標本としてギリシャに送つたのです。それがヨーロッパの栽培クルミの先祖になりました。

野生リンゴも、何種類かがギリシャに届けられたことでしょう。遠いギ

リシャまで何週間もかかります。果実は乾燥させて、枝は枯れないように大きなカブに差し込んで送つたと考えられています。

リンゴは漢字で「林檎」と書きます。これは中国の文字ですから、中国の林檎の話に移りましょう。

林檎の「檎」の中に禽の字があります。玉子を産ませるニワトリや水田の雑草を除くために育てているアイガモなどを家禽と呼びますが、禽は鳥のことです。

林檎は、林の中で小鳥が群がっている果実、に対して名づけられた文字です。

邪馬台国で卑弥呼が活躍する少し前の時代ですが、中国（漢という国でした）で書かれた『西京雜記』（二〇〇年頃）に、宮廷（皇帝が住む建物）の畠にあつた果樹がいくつか述べられています。その中に「林檎」の文字が出てきます。

この果実は、店に並んでいるリンゴのように大きくありません。直径4cm位で、ピンポン玉くらいの大きさです（8ページの図2）。

中国ではこれを二つに割って乾かし、乾果（ドライ・フルーツ）にして食べました。



図2 林檎（和林檎）

中国は広い国ですから、林檎はそれぞれの地方で花紅（ホアホン）、沙果（シャーグオ）、文林郎果（ブンリンランゴ）など様々な名前で呼ばれました。すが、文林郎果の名前が生まれた理由についてです。

唐の時代に李謹（りきん）という人がいて、見事な赤い色の林檎を朝廷（ちょうてい）に献上（けんじょう）したところ、帝（みかど）はとても喜んで謹に文林郎（ぶんりんろう）の位（くらいい）を授けた。それから人々は林檎を文林郎果と呼ぶようになった。

と伝えられています。この位はそんなに高い位ではなく、市役所でいうと主任（しゆにん）ほどの位で

す。

茶道に使う用具で、リンゴの形に似たお茶入れを文林と呼んでいますが、これは文林郎果に形が似ているからです。

林檎の原生地（初めて誕生した地）は中国の北東部です。明の時代に編集された『本草綱目』（一五七八年）に、林檎は渤海地方に生じる、とあります。渤海地方は北朝鮮の北に広がる大地で、中国の吉林省と黒竜江省に当たる地域です。

ここは昭和時代の前半に満州国という国があつて、大勢の日本人々が開拓のために移住した国でした。

渤海は、奈良時代から平安時代の前半（八～十世紀）にかけて存在した国ですが、渤海の人々は珍しい品物を船に積み、船団を組んで日本海を渡り、たびたび日本にやつてきました。

新潟、酒田、秋田などの港に何ヶ月も停泊して、朝廷から派遣された役人や商人と交易を行なつていきました。

林檎がいつ頃に中国から日本に渡ってきたのか、よく判つていませんが、

渤海との交易で渡^{とら}來した可能性があります。

その理由については次の項でくわしく述べますので、渤海という文字が出てきたらその国のこと思い出してください。

明治時代になつて、西洋リンゴ（栽培リンゴ）が日本に入つてくるまで、リンゴと言えば中国からやつてきた、先に述べたピンポン玉くらいの林檎のことでした。

明治政府はこの林檎と西洋リンゴを混乱しないように、林檎をコリンゴ、西洋リンゴをオオリンゴ、あるいは苹果^{へいか}と呼ぶことにしました。

中国では西洋リンゴのことを「蘋果」^{ビングオ}と呼んでいましたから、日本でも同じ漢字を使うことにしたのです。

中国では天山山脈の野生リンゴを新疆野苹果^{しんきょうやへいか}と呼んでいます。新疆は天山山脈がある地方のことですが、天山山脈の野生リンゴがヨーロッパに渡つて西洋リンゴの祖先になり、中国に渡つて苹果の祖先になつたという訳です。

市内牡丹平字福民にりんご研究所がありますが、昭和時代の中頃までは
「苹果試驗場」という名前でした。

西洋リンゴの果樹園が拡大していくにつれて、中国からやつてきた小粒の林檎はほとんど姿を消しました。

リンゴといえば、また林檎と書いてても、誰でも西洋リンゴのこと思い浮かべます。

「苹果」の文字はだんだん使われなくなり、苹果試驗場は名前が変わつてりんご試驗場になり、さらに現在のりんご研究所になりました。

ところで中國原産の小粒の林檎（いわゆるコリンゴ）ですが、現在では「和林檎」と呼び名を変えて、青森、長野、福井などで大事に保存されています。

弘前のりんご公園に何本か植えてありますので、機会があつたら見学して下さい。

二 江戸時代の津軽にあつた和林檎

戦国時代の天文年間（一五三二～五五）に書かれた『津軽郡中名字』という書物があります。

当時の津軽にあつた郡や村の名前、地名などが書いてある大切な史料（歴史を調べるための文書）ですが、その中に「檍團栗木」（名知らず木）という地名があります。檍の団栗に「なしらづ」と仮名がふってあります。

この地は、貞享三年（一六八六、將軍・徳川綱吉が生類憐れみの令を公布した年です）に林子木村になりましたが、この村は明治時代まで残つていました。

その後、名前が日沼村に変わり、現在は弘前市の一部になりましたが、林子木村は林檎の木の村ということです。

昔はこの村が「檍團栗木」と呼ばれていたのです。名前が判らない団栗が、なぜ林子（林檎）の文字に変わったのでしょうか。変わったわけについて調べてみたいと思います。

弘前藩はその日の出来事、行事、事件、来客などを忘れないように記録を残しました。その書物が『藩庁日記』です。その中にいくつか林檎の文字があります。

寛文三年（一六六三）八月二〇日..棟方嘉右衛門、忌み明け候てき
よう御目見えりんき一鉢上げる
延宝三年（一六七五）六月二十四日..林檎一箱 比門主様 右京都に
御発足につき河崎まで之を進ぜ
らる

延宝三年（一六七五）七月 三日..林檎一箱 恵日院（中略）右七
夕の御祝儀として之を遣わせら
れる

延宝五年（一六七七）六月二十四日..御花畠御蔵へりんきの木しけり
かかり、御蔵之屋根朽申由付少
し枝はらひ申哉と（後略）

この記録の中に林檎の他に「りんき」という文字が見えますが、これは

和林檎の一種です。

「りんき」は林檎がどこから日本に渡ってきたのか、を考えるヒントになる名前ですので、次の項でまた説明します。

弘前藩は藩主の家族や、身の周りの世話をする小姓・女中の食事用にする野菜を育てるために、南袋、新寺町、大鰐などの数か所に野菜畑を持っています。その畑には果樹も植えられていました。

宝永二年（一七〇五）五月十七日の『藩庁日記』に、南袋菜園にあつた果樹の本数が書かれています。

梨が七十四本、柿三十二本、梅三本、桃四十一本、丸めろん（マルメロ）一本などです。

梨は三馬屋梨、里姫梨、砂糖梨などの、柿はきさはし（樹淡）、大和柿、まめかき（豆柿）などの品種名も書かれていますが、林檎の文字はありません。

おそらく、酸味が強く、そんなに甘くない和林檎は殿様の口に入らなかつたのだと思います。

もつと甘くておいしい梨や柿や、葡萄なども菜園で育てていたのですから。

現在は平川市に含まれていますが、その唐竹地区に『唐竹村・村之位』という書類が残っています。

徳川綱吉の時代ですが、天和二年（一六八二）に名主の半左衛門が書き残したものです。

唐竹村十六軒のそれぞれの家の人数、田畠の耕作面積、農具、馬の数、農作業の取り決め、さらに結婚式や年中行事のお祝いが豪華にならないよう質素な献立までも書かれています。

この『村之位』に、村人の庭にある果樹の種類と本数が書かれています。

村には梅二十二本、桃二十一本、林檎十八本、梨一本、柿七本、りんご三本の合計八十二本の果樹があつたそうです。

各農家に平均して八本の果樹があつたことになりますが、そのなかに林檎とりんごが含まれています。これらのリンゴは二つに割つて乾かし、保



図3 黒石藩の薬草園があった場所

存食にしたのでしよう。

でもなぜ林檎とりんきが別々の名前で書かれていたのでしょうか。そのわけは21ページ以降で解説します。

おそらく近くの村々にも、黒石藩の村々にも、唐竹村のような果樹があつたのではないでしようか。

弘前藩が野菜と果樹を栽培していたように、黒石藩でも（史料は残っていませんが）野菜畠と果樹園がどこかにあつたはずです。

その場所として考えられるのは、福民のりんご研究所と十和田湖に向かう県道（二六八線）の間にあつた土地で、現在は境家の宅地になっている場所です（図3）。

ここは江戸時代に黒石藩医の北岡^{はんい}大岳^{だいがく}が住んでいて、薬草園^{やくそうえん}があつた場所でした。

『黒石百年史』には、大岳は亡くなる前に自分の墓を作り、墓石^{ぼせき}の表面に果樹^{くだ}をもつて食用^{じゆう}となし 薬草^{やくそう}をもつて仁術^{じんじゅつ}（思いやり）をほどこすと刻ませた、と書かれています。

おそらくこの場所で、黒石藩の殿様の食材^{じょくざい}になつた野菜や、果樹などが栽培されていたと思われます。

明治八年（一八七五）に、県庁を通して十二本の西洋リンゴ苗木^{せいわりんごぼう}が黒石に配布^{はいふ}されました。その一本は黒石藩医であつた北岡^{はんい}太同^{だいどう}が受け取りました。

太同は北岡大岳の子孫^{しそん}で、薬草園^{やくそうえん}を引きついで管理^{かんり}していましたので、このリンゴ苗本は福民に植えられました。

やがて明治時代に入つてから町奉行を務めていた境宥治^{さかいゆうじ}がこの薬草園に移り住み、黒石地方で初めてのリンゴ園を開くことになります。

三 和林檎はどこから日本にやつてきたか

我が国で、「林檎」（この項にててくる林檎はピンポン玉ほどの和林檎のことです）の文字が最初にあらわれる書物は平安時代の九一八年に書かれた『本草和名』です。

本草とは薬用植物のことですが、この本の中に林檎の文字が見えます。しかし本当に林檎の木が日本にあつたかどうかは判りません。

というは、この本は中国（唐の時代）の本草書を翻訳（中国の言葉を日本の言葉にする）して、編集した本で、日本になかつた植物も書かれているからです。

『本草和名』には「柰」と林檎がある。どちらも似ていますが林檎は小さいと書かれています。

「柰」は天山山脈周辺の野生リンゴのことです。シルクロードを通つて西のギリシャに渡つて西洋リンゴの祖先になり、東の中国にも渡つて苹果（ピングオ）と呼ばれるようになりました。

『日本書紀』（七二〇年）や『古事記』（七一二年）には梨、桃、李、橘（柑橘類）の名前があり、『万葉集』（七九〇年代末）に梅、棗が出てきます。

これらの果樹は全て中国や朝鮮から日本に入ってきたのですが、林檎の名前はありません。まだ日本に渡つていなかつたのです。

林檎が日本にあつたことを示す史料は、平安時代の終わり頃から鎌倉時代になつてから現れます。

奈良市の春日大社の庭に、現在でも林檎が植えられています（20ページの図4）。神社の由来書（設立の理由をのべた書類）によれば、この林檎は高倉天皇（在位一一六八～八〇）が奉納（敬つて奉げること）したものだそうです。

高倉天皇といつても知らない人が多いと思ひますが、妃は平清盛の娘でした。やがて清盛の一族（平家）は源氏と戦い、壇ノ浦の決戦で敗れます。

その戦いで、まだ幼い安徳天皇は乳母に抱かれて海に飛び込みました

が、この安徳天皇の父が高倉天皇です。



図4 春日大社の林檎（和林檎）－インターネット情報－

鎌倉時代の有名な歌人、藤原定家の日記で
ある『明月記』の嘉禎一年（一二三五）の閏
六月八日に、庭樹の林檎を籠に入れて…と
いう文章があるので、この頃には林檎は確実
に存在していました。

林檎が神社に奉納されたり、上流貴族の
庭に植えられていたのは、味はどうかくし
て当時は珍しい果物であつたからでしょう。

ところで林檎の原産地（初めて誕生した
地）は中国の渤海地方ですが、どのようなる
トで日本に渡ってきたのでしょうか。

このことを考える手がかりの一つに林檎の
文字の読み方（発音）がある、と筆者は考え

ています。

私たちは林檎を「りんご」と読みますが、韓国かんこくでは「リングム」です。どちらも、中国の南の方で使われていた吳音ごおん（吳の国の発音）の影響を受けた発音ですが、奈良時代には大勢おおぜいの渡来人どらいじん（海外からきた人）が朝鮮ちょうせんから日本に渡り、奈良や京都に住みついていました。

渡来人は林檎を「りんぐむ」と発音した、と思います。それが「りんご」に変わった、と考えてもいいと思います。

図4や図2（8ページ）の「りんご」は朝鮮半島から日本に渡ってきたと思われます。

一方、中国の北の地方の人々は林檎を漢音かんおん（漢の国の発音）で「リンキン」と読みました。

現在の中国でも林檎は「リンキン」と発音します。渤海でも林檎は「リンキン」といいました。

『藩庁日記』や『唐竹村・村之位』に見られる「りんき（りんきん）」は、明らかに林檎の漢音読みです。

江戸幕府は享保二十年（一七三五）から数年をかけてすべての藩に命じて、その地の農作物、植物、動物、鉱石などの品名を詳しく報告させました。

これをまとめた書物が『享保・元文産物帳』です。原本は残つていませんが、三分の一ほどの藩で、報告の控え（コピー）が見つかっています。この中から、林檎、りんご、りんきなどの文字をひろつてまとめるときのようになります。

— 享保元文時代（一七三五～四〇）の林檎の植栽地 —

- | | | |
|----|------------|-----------------------|
| 東北 | 陸奥国南部領（岩手） | りんご・りんきん |
| | 陸奥国田村郡（福島） | りんご |
| 関東 | 羽州庄内領（山形） | 柰 ^{からなし} ・林檎 |
| | 羽州米沢領（山形） | 柰 |
| 中部 | 常陸国水戸領（茨城） | リンコ |
| | 下野国河内郡（栃木） | りんご |
| | 佐渡国（新潟） | 林檎 |
| | 加賀国（石川） | りんご ^a |

能登国（石川）..柰 りんご

越中国（富山）..りんご

越後国（新潟）..林檎 b

信濃国高遠領（長野）..りんき

信濃国筑摩郡（長野）..林檎・りんき

飛驒国（岐阜）..林檎

美濃国（岐阜）..りんご

尾張国（愛知）..りんご

近畿
近江国高島郡（滋賀）..りんご

紀伊国（和歌山）..りんご

和泉国岸和田領（大阪）..りんご

周防国（山口）..林檎

長門国（山口）..林檎

備前国岡山領（岡山）..林檎

出雲国（島根）..林檎

対馬国（長崎）..林檎

豊後国熊本領（熊本）..りんご

筑前国（福岡）..りんご c

a.. 実紅ナル林檎 柰 先年故稻生若水朱柰にて可有之由申聞候、近年は木痛み寒成不申候、但常の林檎よりは実小さく御座候

b.. 何方にも往々有り、蒲原郡に多し、新潟は名物なり

c.. 当国には成長せず、他方より伝えうふれども枯れやすし、故に稀なり

中國
九州

これを見ると、「りんき」の文字があるのは岩手と長野だけです。江戸時代の後半に小野蘭山が書いた『本草綱目啓蒙』（一八〇三）には、

りんき加州 林檎の種類にして寒国に生ず 故に加信奥羽に多し
（中略） 実の形林檎と同きあり又小さくしてそうして微長なるも
あり 皆熟して鮮紅なり

という記述があります。

判りやすいように書きかえれば、

りんきは加州（石川）、信州（長野）、奥州（青森・岩手・秋田）、
羽州（秋田・山形）に多く、その形は林檎と同じものと、林檎よりも小さくてやや微長なものがある。どちらも熟すと真っ赤な色になる。

となります。

現在の果樹分類学では、りんきは林檎の変種と分類されていますが、江戸時代の本草家も林檎の種類であると考え、真っ赤な色をしたものを作りましたと呼んでいました（図5）。

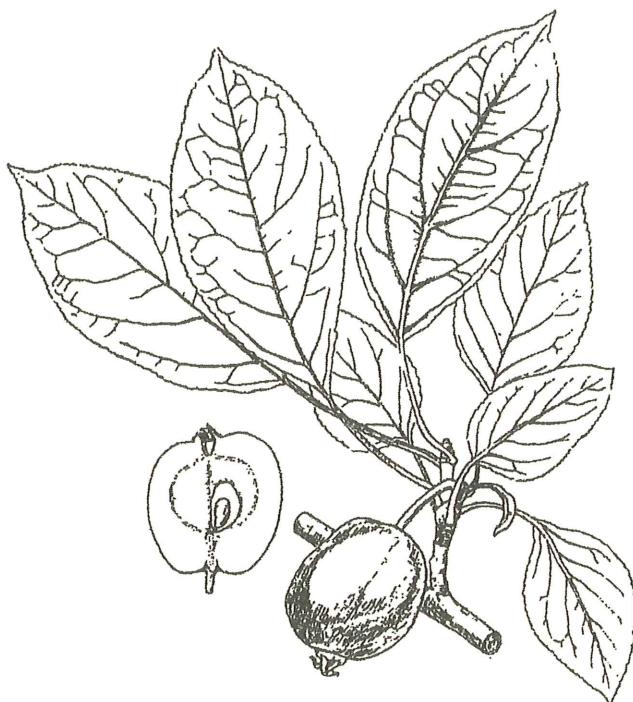


図5 和林檎の一種‘りんき’

林檎は淡い緑のあちらこちらに淡い赤が広がっているような果実です（8ページの図2）。

図5のりんきを見て下さい。少し長い果実の形は、なんとなく『津軽郡中名字』に出てくる林子木村の古い名前であつた樅園栗の「どんぐり」に似ているような気がしますが、気のせいでしょうか。

ここまでまた渤海の話に移りますが、古い時代から渤海は日本の東北地方と深い関係がありました。

『日本書紀』の中に、阿倍比羅夫が東北の蝦夷（古代の東北地方に住んでいた人びと）に頼まれて、肅慎（古代の中国北東部に住んでいた人びと）を討つ記事が出てきます。

肅慎はツングース民族^(注)の一部族で、四世紀から九世紀にかけてサハリンやロシア沿海州から、たびたび北海道、東北地方に船でやつてきました。

新潟の佐渡島^{さどがしま}に現れたという記事も『日本書紀』に出てきます。

(注) 中国東北地方やロシア沿海州で遊牧を中心とした生活を営み、ツングース諸語を使用した人々。アムール河やサハリンの少数民族、エヴエンキ・ウイルタ・ナナイ族、大陸の肅慎・靺鞨・女真族(満州族)などはツングース民族に含まれる。郷土史家の佐藤雨山は、農業のかたわら狩猟生活を行う青森、秋田県のマタギを日本に渡来したツングース民族の子孫であると考えていた。

四世紀から九世紀にかけて日本海を渡つてしましばしば日本にやつて来た肅慎ですが、渤海は、肅慎の子孫たちが七世紀の終わり頃に作った国です。

渤海の船団は交易^{こうえき}を求めて、たびたび日本の港にやつて来ました。渤海の港はウラジオストックの西にありました。

毎年、秋になると日本に向かつて北西の季節風^{きせつふう}が吹き始めます。船を海上に出して帆^ほを上げると、風を受けて数日で日本に到着^{とうちやく}できます(図6)。

日本の海岸に近づくと対馬海流^{つしまかいりゅう}によつて北に流されますから、どうしても山形や秋田県の海岸に着いてしまうのです。記録は残つていませんが、



図6 渤海と日本の交易海路

青森県の海岸にも着いたことでしょう。

ときどき北朝鮮の漁船が東北地方の沿岸に流れ着いたニュースを見ますが、同じ理由で流れ着くのでしょうか。

交易の船だけではありません。日本に住むために大勢の人びとも渡つてきました。

記録に残っているだけでも、天平十八年（七四六）に約一、一〇〇人、宝亀二年（七七年）に約三三〇人、その八年後にも約三六〇人が出羽（秋田）に漂着して、帰化（日本人になること）を求めています。

何百人も移住して生活を始めると、その言葉はまわりの言葉に影響を与えます。

山形、秋田、青森などのズーズー弁ですが、

モンゴル史が専門であった作家の司馬遼太郎は、ズーズー弁は肅慎などのツングースの影響を受けた訛りである、と考えていたようです。

リンゴに関係がない話が続きましたが、渤海と古い時代の東北の日本海側は、文化的にも物資的（品物の交換や購入）にも、ひょっとしたら人類的（異なる民族の交流）にも深い関係があつたことを知つてもらいたかつたからです。

日本にやつてきた人たちは、大量の林檎を積んで船出した、と筆者は考えています。

乗組員が食べるのではなく、食糧として積み込んだ、生きた豚や鶏の餌にするためだつたのでしょう。

その中に、真っ赤で、ドングリのように少し長い形をした品種が混じつていた、と思ひます。

それまで京都や奈良で貴族や寺院の庭に植えられていた林檎は丸く、淡い緑と淡い赤が混じった色でした（8ページの図2）。

東北の人たちもこの林檎を知っていましたから、真っ赤でドングリのような形をした林檎を区別して、「りんりん」と呼んだのではないか、と思います。

もちろん、「りんりん」は渤海の人たちが東北の日本人に伝えた言葉であると考えていいでしょう。

リンゴはイギリスでアップルapple、オランダはアップペルappel、ドイツはアップフエルapfelですが、トルコではエルマelma、カザフスタンやキルギスではアルマalma、モンゴルではアリムalimと呼びます。

呼び方が似ていますが、似ていませんは民族の移動や交易の歴史と深くかかわっています。

「りんき」は林檎の漢音読みで、この言葉が存在したのは青森、秋田、山形、長野など日本海側の地方だけでした。

これに八世紀から十二世紀の頃（奈良時代から平安時代）の日本海交易の歴史を重ね合わせると、「りんき」の故郷として、「渤海国」が浮かんでくるのです。

四 ペリー提督がお土産に持つてきた西洋リンゴの苗木

西洋リンゴは江戸時代の終わり頃の嘉永七年（一八五四）の春に、初めて日本にやつてきました。

加賀藩（金沢藩）の江戸屋敷に務めていた小川仙之助が、安政二年（一八五五）十一月二十四日に書いた日記に、

去春亞墨利加渡来之アツフル、木作足輕へ御渡植付被仰付候所出来仕候ニ付、上之申候所御奥ニ而〇程之餅之上へアツフルをぬり被食候様ニ被仰付候旨ニ而御側廻リヘ頂戴被仰付候

とあります。

むずかしい文ですので現代文になおすと、

昨年の春、亞墨利加から渡来したアツフル（アップル）を庭木の世話をする足輕に渡して植え付けを仰せつけたところ、実が出来た。

このことを申し上げたら、屋敷の方が〇不明程の餅の上にアツフルを塗つて（重ねて）食べてみるように仰せられた。旨かつたの

一で、お側そばの人たちに頂戴ちようだいするよう仰せつけになつた。――
という内容になります。

昨年の春はるとは嘉永七年（一八五四）の春のことです。ペリー提督ていどくが二回目に日本にやつてきた年で、日米和親条約にちべいわしんじょうやくが結ばれた年でした。

ペリーは江戸幕府に贈るため、沢山のお土産たくさんを持つてやつてきました。その中に蒸気機関車の模型もけいや電信機でんしんきがあり、集まつた人々の前で動かして驚おどろかせたことはよく知られていますが、日本になかつた珍めずらしい野菜や草花の種子なども持つてきました。

どんな苗木や種子を持つてきたのか、残念ざんねんながら史料は全く残つていません。

しかし小川の日記が発見されたことによつて、ペリーがリンゴ苗木を持つて来て、一本が（あるいは数本が）加賀藩主の前田斉泰なりやすに渡され、板橋ばしにあつた下屋敷しもやしき（野菜などを育てた屋敷）に植えられたことが判りました。

ペリーが持つてきたリンゴ苗木について、別の史料も見つかっています。

福井藩の元藩士、鈴木準道のりみちが明治時代になつてから書いた手紙です。

それは巢鴨すがもの下屋敷に西洋リンゴの木があつたことを思い出して書いて

もので、

安政六年三月二初メ而江戸表相詰被申付（中略）古詰之者ニ同行、夜巢鴨下屋敷へ罷越御庭等拝見候節、未三・四足御庭ニ遊びおり、所々拝見候内庭番之人これハ西洋林檎之木申聞候事ハ予之耳ニ留居も、実も無之聽流しニ致候
とあります。

判りやすいように書きなおすと、

安政六年（一八五九）三月初めに、江戸勤務えどきんむを申し付けられました。（中略）古くから勤務している人に同行して、夜に巢鴨の下屋敷へ行き、庭などを拝見したときのことですが、羊ひつじが二、三四匹、庭で遊んでいました。

所々拝見しているうちに庭番にわばんの人がこれは西洋林檎の木だと言つたことを私の耳に留めましたが、実がなかつたので聞き流しました



— た。

となります。

安政六年は、ペリーが西洋リンゴの苗木を幕府に贈ったと思われる嘉永七年から五年後の年ですが、なぜこのリンゴはペリーが持つてきたものだ、と判るのでしょうか。

それはペリー提督が日本に来てから二年後に、総領事ハリスが下田に着きましたが、リングの苗木は持つてきませんでした。その後は一度も、アメリカの艦隊は日本に来ていないのです。

安政七年（万延一年）に大勢の幕府使節が咸臨丸に乗つて、初めてアメリカに渡りました。

艦長は勝海舟で、福沢諭吉も使節の一人でした。使節団は沢山の珍しい品々を買い求め、日本に持ち帰りました。

その中にリンゴの苗木もあつて、何人かの大名に渡されたと伝えられていますが、その証拠になる史料はまだ見つかっていません。

先に述べた鈴木準道の手紙にある、「羊が二、三匹、庭で遊んでいた」、菫鴨の下屋敷ですが、ここは福井藩が野菜や果物を育てていた屋敷でした。

藩主の松平春嶽は、珍しい外国の家畜や果樹に興味をもち、それらを輸入して新しい産業を興そとと考えていた人でした。

六年後の慶應一年（一八六五）になつてから、この屋敷の様子を書いた手紙が残っています。

庭守として福井から転勤した岩屋という人が書いた手紙ですが、

西洋林檎の苗が数百株、植え付けられていた。だれも手入れをする者が無く、植え放しの状態であつた。

苗の木札には洋文字が書かれていた。
と書いてあります。

‘数百株’の‘洋文字’が書かれた木札、が付いた苗木ということは、輸入した苗木であることを示しています。

何本かは地元の福井に送られて植えられたようですが、下屋敷の西洋リンゴが、その後どうなつたのか判りません。

菴鴨は江戸の中でも特に植木職人うえきしょくにん人が多く住んでいた村でした。桜や躑躅つつじなどの庭木の苗がこの村で育てられ、神社、寺院の露店や町々の市で売られました。

その苗木のなかに、もしかしたら荒れはてた下屋敷の枝をだれかが切りとり、接ぎ木をして育てた西洋リンゴの苗木も混じっていたかも知れません。

五 黒石に届いた西洋リンゴ苗木

(一) 明治政府が試しに植える苗木を配布

青森県庁から黒石にリンゴ苗木が送られたのは明治八年（一八七五）でした。初めにその事情について紹介しよう。

新政府は明治六年に、新しい産業を興して国を発展させるために内務省を設置しました。

内務大臣（当時は内務卿といいました）は大久保利通で、欧米を視察して先進国の工業、商業、農業、教育制度を学び、それを日本に取り入れようとした人です。

利通は日本の貧しい農村を豊かにするために、欧米の優れた果樹を輸入して接ぎ木で増やし、これを全国に配布して試植（試しに植えること）してもらい、その地方で栽培できるかどうかを調べようと考えました。

優れた果実は高く売れますから、育てた農民が豊かになります。栽培が広がればその地域も豊かになります。

勸業寮

(注)が試植を考えた海外の果樹は、

苹果(西洋林檎)、梨、桃、李、杏、櫻桃、巴旦杏、葡萄(米)
—国産)、支那葡萄、無花果、須久利、房須久利、榅桲、苺

の十四種類でした。

(注) 勸業寮・明治政府のもとで農・工・商業を振興させるため、明治七年(一八七四)に内務省に新設された部局。

これらの果樹は、品種は違いますが以前から日本にあつたものです。

農家の人々が育てやすいように、慣れ親しんでいる果樹を選び、日本になかつた大きくて、甘い実をつける品種を海外から輸入したのです。

勸業寮は新宿試験場で苗木を増やし、全国に無料で配布して試植してもらうことにしました。土壤の性質や気候で、その土地でうまく育たない可能性があるからです。

様々な苗木が青森県に届いたのは明治八年の春と秋、九年の秋の三回でした。県庁の山林係にいた菊池楯衛がとりあえず庁舎の庭に仮植えして保存し、各郡に配布しました。

一回目は本数が少なかつたのですべて二戸郡に配布しましたが、二回目

に届いた苗木は三四六本で、リンゴが七八八本含まれていきました。

そのうちの十二本のリンゴが南津軽郡に割り当てられた、と言われています。受け取った人々は黒石に住んでいた旧藩士、神官、町年寄（町内のまとめ役）などでした。

試植の苗木ですから、うまく育つかどうか、生育の状態や気候・土の性質などを報告しなければならなかつたのです。

書類を書くのが得意で、教養のある人たちが苗木を受けとりました。

『南津軽郡經濟要覽』（昭和十年、一九三五、発行）には、二回目のリンゴ苗木を受け取った人々の名前とリンゴの品種が載せられています。それらは、

アレキサンダー	山形村	境	宥治（藩士、町奉行）
大 緑	中郷村	小山内清定（藩士）	
丸 光	黒石町	対馬 大成（藩医）	
晩	山形村	境	宥治

黒石鶴ノ卵
玉霰

黒石町 天内 豊（藩士）

で、（ ）は黒石藩時代の身分、住所は昭和十年の住所です。

三回目には青森県に一、八三五本（リンゴは二三〇本）の苗木が届いています。

黒石に何本のリンゴ苗木が届いたのか判りませんが、佐藤金吾（神官）、長内秀太郎（藩士）、吉村真（藩士）、唐牛桃里（藩士、大目付）、浅川道（藩士）、境連蔵（十一屋、町年寄）などの名前が『黒石百年史』や『明治前期りんご植栽拡大史』に見えます。

リンゴ以外の苗木も届いたはずですがその記録は残っていません。右に述べた品種や受領者の名前は役所の記録にあつたものではなく、町の人たちの日記や言い伝えなどをもとにして大正時代にまとめられたものです。

藩医の北岡太同が受け取った苗木は、藩の薬草園があつて北岡が住んで

いた福民（山形村）に植えられましたが、他の苗木はすべて町内の自宅の裏庭で育てられました。

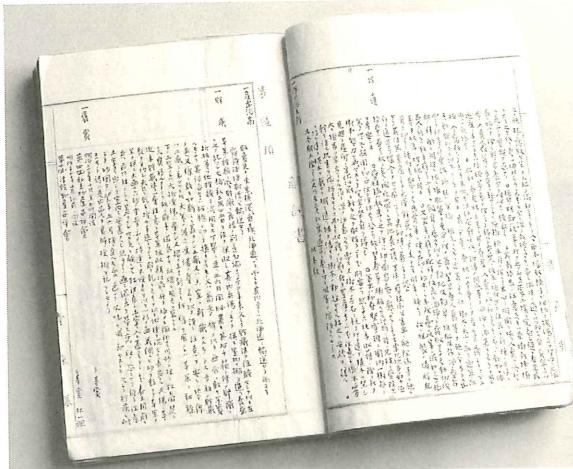
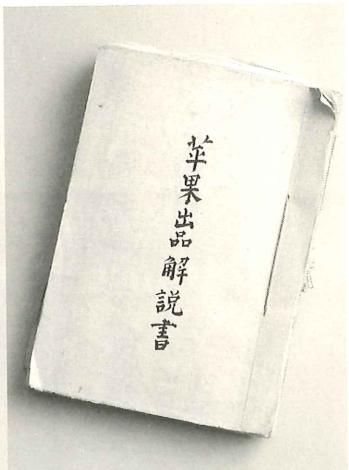


図7 リンゴ栽培の書類をまとめた苹果出品解説書

境宥治が受け取ったリンゴは、明治十三年（一八八〇）に実をつけた、と宥治が書いたリンゴ栽培の『解説書』に書かれていますが（図7）、品種や大きさは判りません。他の人たちについては記録が残っていません。

弘前では明治十年に三個の実がなつたそうです。旧藩士の山野茂樹が植えた苗木で、山野は弘前藩校、稽古館の総司（学長）を務めた人でした。

このリンゴはカスピ海周辺で栽培されていた紅魁という品種で、青森県で初めて西

洋リンゴの実がなつた、と北斗新聞（後の東奥日報）で報じられました。テニスのボールより少し大きい位の、今のリンゴと同じくらいの大きさでした。

（二）黒石町内のリンゴ栽培とその消滅

試植の苗木が配布されたのち、明治政府はだれでも自由に栽培ができるよう、いろいろな苗木を増やして販売することにしました。

弘前でこの仕事を始めた人が、県庁にいた菊池楯衛です。

苗木の配布が終わつてしまもなく、北海道に出張して七重（函館郊外）にあつた勧農寮（注1）の試験場で接ぎ木の技術を学びました。

その後、退職して弘前に帰り、明治十三年（一八八〇）に埼玉県の安行村から数万本の果樹を仕入れて販売しました。

楯衛は苗木を接ぎ木で増やす方法を人々に教えて津軽にリンゴを広めた恩人で、青森県リンゴの開祖、と呼ばれています。

リンゴの枝を接ぐ台木に使ったのはサナシ（ズミ）の幼木でした。

江戸時代の終わり頃に巢鴨下屋敷のリンゴをズミに接いだ人がいました（注2）が、楯衛は独学でサナシを台木に選んだようです。

（注1）勧農寮・欧米の農業と技術を我国に取り入れて普及させるために、明治四年に大蔵省の部局として設置された。三年後に内務省に移され、勧業寮に名称変更された。

（注2）我国最初の西洋リンゴの接木は、慶應二年（一八六六）、幕府の開成所（後の東京帝国大学）に務めていた植物学者・田中芳男が福井藩巢鴨下屋敷の西洋リンゴの枝をズミに接いだもの。田中芳男は農商務省の農務局長、東京高等農学校（後の東京農業大学）の初代校長などを務めた。

明治十二～十三年頃から、弘前でも黒石でもリンゴ苗木が接ぎ木でどんどん増え、それを買って自宅に植える人々や果樹園を作ろうとする人々が増え始めました。

リンゴ園作りに挑戦したのは、大地主と廢藩置県（藩をなくして県を置くこと）で武士の仕事を失った旧藩士でした。

明治政府は廢藩によつて職を失つた旧藩士に、藩政時代の俸禄（給料）の数年分を退職金として渡し、それを資金にして新しい仕事を始めたのもおうと考へていきました。

さらに弘前藩と黒石藩の場合は、藩が大地主から余分な土地を安い値段で買い集め、旧藩士に分け与えて、農業で生活ができるようにしたのです。

旧藩士が土地をもらい、政府からの退職金を受け取ったのは明治十二～十三年の頃でした。菊池楯衛はその資金で数万本の苗木を購入し、弘前で苗木の販売店を開きました。

福民にリンゴ園を開いた境宥治も、政府からの恩賜金（退職金）で土地と苗木を買い求めた、と書き残しています。

黒石は東西と南北に碁盤の目のように道路が組まれ、それらの道路に面して士族(注3)や町民の屋敷が並んでいた町です。

屋敷の裏側は、かぐじ、と呼ばれる耕作地で、野菜が植えられ、梅や桃などの果樹もありました。ここにリンゴ苗木が植えられたのです。

(注3) 明治政府は、公卿や藩主の身分を華族、藩士（侍）を士族、町民や農民を平民としました。この身分制度は昭和二十年まで続いた。

明治三十七年（一九〇四）に、町の人たちが、かぐじ、で栽培していた

リンゴの本数と、戸数は次の通りです。

山形町	一、三四五（九九）	中町	一〇二（一九）
鍛治町	二一三（三九）	浜町	一七八（三六）
前町	二二二（二八）	徳兵衛町	五一（二三）
甲裏町	一一八（二二）	大板町	二〇（九）
乙裏町	五〇（一七）	寺小路	一五（一四）
馬喰町	一二三（二二）	油横丁	二六（一〇）
寺町	六五（五）	株梗木横丁	三九（一〇）
市ノ町	一五四（一〇〇）	甲大工町	一〇五（八）
内町	二二六（一三）	後大工町	一二二（一二）
横町	九八（一六）	元町	三四四（五〇）
上町	一三四（二三）	計	三、七五〇（五七二）

その頃の黒石町の戸数は約一、二〇〇戸で、人口は約七、八〇〇人ほどでした。

この数字と表にあるリンゴの本数を比べてみると、二戸に一戸の町民が、

平均して六・五本のリンゴを裏地に植えていたことになります。

なかには神官の佐藤金吾のように、甲大工町に四十本、後大工町に五十
九本ものリンゴを植えていた人もいましたが、多くの人々は副業や自
家消費用として植えていました。

明治十五年（一八八二）に黒石で生まれた作家の秋田雨雀は、「わが郷里
の女たち」と題した隨筆すいひつの中で、

どんな家でも少しの地面があれば、必ず林檎の樹を植えている。
士族も町人も百姓も大抵、林檎畠うらにわ（裏庭の畠）を持つていらないも
のはないといつていい位である。

ある商家などでは、主婦が一日店の仕事で暮らせば翌日は一日林
檎畠で暮らすといったようなところがいくらもある。（中略）
女に一番適てきしているのは、果にかぶせる袋を貼る仕事である。こ
れを袋貼ふくろはりという。（中略）

林檎の果にかぶせる袋を貼る事が、私達の郷里の女の唯一の内ゆいな
職しょくになつてゐる。

と書いています。

小さい果実に袋をかけて害虫を防ぐ方法は、明治三十七年（一九〇四）に元町の奥村喜蔵よしそうが津軽地方で最初に始めた方法ですから、秋田雨雀の隨筆は明治時代の終わり頃に書かれたものでしょう。

袋かけが行われる前の頃の病害虫の防除法は、

1 秋にリンゴの幹みきにワラを巻き、越冬えつとうのためにもぐり込んだ害

虫をワラと一緒に焼く方法

2 春になつてから、布を巻いた棍棒こんぼうで枝を叩いたり、枝を揺らしたりして、幼虫ようちゆうを地面に敷いた白布に落とし、それを集めて焼却しようきやくする方法

3 鯨油げいゆや石油などを石鹼せっけんで溶かして水でうすめ、ジョウロで枝にかけたり、刷毛はけで塗つたりする方法（注4）

などでした。

害虫は袋かけで何とか防ぐことができますが、モニリア、腐乱病ふらんびょうなどの病原菌びょうげんきんが発生して起ころる病気は農薬がなければ防げません。